

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	小沢隆之
主 論 文 題 名 : アウグスティヌスにおける精神の自己認識の諸相——『三位一体論』読解			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本論文の目的は、『三位一体論』の後半巻における議論全体の整合性に配慮しつつ、精神の三一性、すなわち自己記憶・自己知解・自己意志(愛)の恒常性に関するテーゼに解釈を与え、それらの働きの内実を明らかにすることである。そして、この作業を通して、アウグスティヌス的認識論の基本的枠組み——知・認識・愛(意志、欲求)・思考・記憶・知解・内的な言葉——の明確化も試みる。</p> <p>「精神は常に自らを記憶し、知解し、意志(愛)する」というテーゼは、『三位一体論』において繰り返し語られているものの、その内実はアウグスティヌスによって明らかにされておらず、また解釈者たちのあいだでも見解の一致をみていない。その原因としては、「記憶」・「知解」・「意志(愛)」といった概念それ自体の一定の解釈が存在しないことが挙げられる。またこれらの概念が説明される際に用いられる「知」・「現前」・「思考」といった基礎的な概念にすら解釈の余地がある。そのうえ先行研究同士の相互的な批判もほとんど存在せず、諸解釈が乱立している状況が続いている。このような状況を打破するため、本論では先行研究に対峙しながら、アウグスティヌス的認識論の基本的枠組みをできるだけ正確にテキストから掬いだし、理解可能なものを目指す。</p> <p>I章「精神における自己知と現前」では、現前と知の関係、そして精神が何らかの知を獲得する際のメカニズムが論じられる。『三位一体論』において、精神の自己知と精神の現前は明示的に関係づけられているが、その関係が具体的にどのようなものであるのかは明らかではない。本章は、先行研究を批判的に検討しつつ、その関係を解明することを目的としている。一部の研究者は、精神の現前は、精神にとって「直接的」であり、それゆえに「自己知の根拠」としてみなしている。しかしながら、なぜそのような直接性が自己知の根拠となるのかは説明されておらず、不分明さが残る。そのようななか、Emmanuel Bermonは新たな解釈を提示している(<i>Le cogito dans la pensée de saint Augustin</i>)。彼によれば、精神の現前は自己知のあり方を示している。またBermonの研究の独自性は、見だし(<i>inuenire</i>)という働きと精神の自己知を結びつけている点にある。新たに見いだされることなく、知られている状態が精神の自己知と、Bermonは考えている。</p> <p>彼の研究をふまえて、本章は精神における自己知と自己現前との関係を考察し、精神の自己知と精神以外の知とのあいだにある異なりを明らかにする。探求(<i>quaerere</i>)と見だし(<i>inuenire</i>)という枠組みによって、認識がいかんにか説明されているのかを確認することによって、精神の自己知の特異性を明らかにすることを試みる。通常の知は、探求と見だしという働き——すなわち、知ろうと意志することと、実際に知るようになること——が必要不可欠である。これらの働きはいわば運動的なモデルで捉えられている。それに対して、精神の自己知はそのような働きを必要としていない。この意味で精神は自らを常に知っているとされる。精神の自己知のかかる特性を説明するために、アウグスティヌスは「精神の自己現前」という表現を用いている。そして、同じ事態が空間的・運動的な観点からは自己現前と表現され、認識論的</p>			

な観点からは自己知と表現される。また本研究にとって重要な論点として、探求と愛・意志との同一視、そして二種類の愛・意志の存在が指摘される。一方の愛は何か二つのものを結びつけようとする愛・意志であり、他方の愛は二つのものを実際に結びつけている愛である。このことは認識においても当てはまる。つまり、精神がそれによって知を求めようとする愛と、精神と知を結びつけている愛が認識において存在していること。

II章「精神の自己知」では、精神の自己知と現前との関係を明らかにした前章の議論を踏まえ、精神の自己知の内実を解明する。10巻において繰り返されている精神の自己知の諸論証に関する解釈を新たに提示することを試みる。われわれと同様の狙いを持つ、Ludger Holscherによる研究 (*The Reality of the Mind Augustine's Philosophical Arguments for the Human Soul as a Spiritual Substance*) と Gareth Matthewsの論考

(“Augustine on the Mind's Search for Itself”) を批判的に検討することによって、議論が進められる。本章では、彼らが考察の対象としていない自己知の論証をもカバーするような解釈を提案する。最終的に提示される解釈によれば、精神の自己知とは、「自分が自分であることについての知」であり、この知によって自らが他ならぬ自らであると判り、そしてこの知があるおかげで、われわれは他者と自身を区別することができ、「自ら」という概念や言葉を何の支障もなく用いることができる。前章において、常に知られているとされていたのは、まさにこのような知である。この解釈が正しければ、アウグスティヌスは〈自ら〉という語を二つの意味で用いていることになる。一つは、何らかの内実を伴う〈自らa〉であり、もう一つは、〈自らa〉の理解の前提となる〈自らb〉であり、形式的な、あるいは再帰性を示す〈自ら〉である。この〈自らb〉についての知によって、〈他〉と〈自ら〉の区別が可能になり、そうして働きや性質の自己帰属が可能になる。

III章「精神の自己思考」では、『三位一体論』において知 (notitia) と対比的に論じられている思考 (cogitatio) という概念についての統一的な解釈を追求した。本章の基本的な目的は、『三位一体論』におけるアウグスティヌス的な思考の内実をアナクロニズムに陥ることなく、明らかにすることである。このような問題意識を共有する先行研究として、Gérard Verbeke (“Pensée et discernement chez saint Augustin. Quelques réflexions sur le sens du terme « cogitare »”) と Gerard Watson (“Cogitatio” in *Augustinus-Lexikon*) による論考を挙げることができる。本章は主に彼らの論考を手がかりにして『三位一体論』における「思考」を論じてゆくが、彼らの議論と本章の議論とのあいだには方法論的な違いがある。まず彼らの研究は、アウグスティヌスの複数の著作に基づいて思考の特徴を提示しているが、本章では『三位一体論』のテキストのみからそれを再構成する。そして彼らが思考を複数の意味をもつものとして、いわばモザイク的に解釈するのに対して、本章が提示する解釈は包括的なものである。われわれの解釈によれば、思考とは、記憶に含まれるものに精神の眼差しを向け変えようとする意志すること、すなわち記憶に含まれているものを想起しようとする意志することである。思考のこの特徴は、精神にもそれ以外の対象にもあてはまる。つまり、対象Oを思考するとは、探求と見だしによって獲得された対象Oについての知を想起することである。思考がそのように規定されるのであれば、それは知と次の点で根本的に異なるといえる。すなわち、知は持続的に存在するのに対して、思考は想起しようとする意志が存在するの でなければ持続しない。こういってよければ、思考の働きは断続的であることになる。

IV章「精神の自己記憶」では、本研究の主たる解釈対象である「精神は常に自らを記憶し、知解し、意志(愛)する」というテーゼに含まれている「自己記憶」の内実を明らかにする。アウグスティヌスの記憶概念に関する研究は古くからなされており、『三位一体論』において集中的に議論されている自己記憶にも強い関心が持たれ続けている。そして多くの場合、この自己記憶には、認識論上の特権的な地位が与

えられてきた。しかし、ほとんどの研究はこの自己記憶を『告白』での記憶論と関係づけ、『三位一体論』に固有な文脈に沿うようなしかたで議論していないように思われる。そのような状況にあつて、近年Charles Brittainは、『三位一体論』の議論の脈絡に寄り添いながら、自己記憶に関する新たな解釈を提示している（“Intellectual self-knowledge in Augustine (De Trinitate 14.7-14)”）。この論文で、Brittainは二つの重要な指摘をしている。一つは、精神の自己現前が精神の自己記憶である（あるいは構成している）、という指摘である。これによれば、精神の記憶の恒常性を成立させているものが、自己現前ということになる。いま一つは、自己記憶とは、人間精神の諸機能に潜在的なしかたで影響を与えるものであるという指摘である。意識に昇らずともわれわれの経験に影響を与えるものが自己記憶である。

この二つの指摘には問題点がある。前者に関しては、自己記憶と自己現前の関係が明らかでない。また後者に関しては、アウグスティヌスの議論からは「意識に昇らずともわれわれの経験に影響を与える」という特徴を読み取ることが困難であるという問題点がある。基本的には彼の議論の整理に私は賛同しつつ、自己記憶と自己現前の関係を説明するような次のような解釈を提案する。すなわち、自己記憶は精神自身を現前させるための〈場〉という役割を果たしている。I章で確認したように、精神以外のものは精神にいわば後天的に生じるようになったのに対して、精神自身は、精神が存在し始めたときから、常に自らに対して存在してきたのであって、これが「精神の現前」という表現の意味であった。以上の解釈をふまえて、自己記憶と自己現前とのあいだの関係は次のように理解される。精神が自らにとって常にあることは、精神自身が記憶において常に存在しているということである（精神は自らにとって新たに存在するものではない）。ところで、何らかの対象Oが記憶においてあるとは、Oが記憶されていることである。そのため、精神が自らにとって常にあること、すなわち精神が自らに常に現前していることが、精神が自らを常に記憶しているということに他ならない。あるいは、記憶が認識論的文脈で用いられ、それに対して現前が存在論的文脈で用いられる概念だと理解するならば、〈精神が自らを常に記憶している〉という認識論的観点と、〈精神が自らに常に現前している〉という存在論的観点から同一の事態が説明されていることになる。

V章「精神の自己記憶と精神の自己知解の両立可能性」では、「精神は自らを常に知解する (*intellegere*)」という事態がいかにして可能であるのかが論じられる。アウグスティヌスによれば、知解という働きは思考の働きを必要とするが、精神は自らを常に思考しているわけではない。そのとき、精神が自らを常に知解するのは、いかにしてかという問題が生じる。アウグスティヌスはこの問題を解決するために、〈最奥の言葉〉あるいは〈心の言葉〉という概念を提示している。この概念の分析を通して、「精神は自らを常に知解する」という事態をアウグスティヌスのテキストから整合的に解釈し、自己知解と自己記憶のあいだにある根本的な差異を浮き彫りにする。その際、われわれと対立する解釈を提示している Brachtendorf (*Die Struktur des menschlichen Geistes nach Augustinus: Selbstreflexion und Erkenntnis Gottes in "De Trinitate"*) の議論を検討しながら、議論を進めていく。彼によれば、〈知解〉という働きが恒常的ではないという前提と、あのテーゼ（「精神は常に自らを記憶し、知解し、意志（愛）する」）との対立が存在するわけではない。彼の言葉を借りれば、前者の理解は〈外的な知解〉であり、後者は〈内的な知解〉である。またこのような〈内的な知解〉には、思考は必要とされない。したがって、〈精神は自らを常に知解する〉という主張における〈知解〉と、通常の意味での〈知解〉は、その内実において異なるのだから、対立は存在しない。彼の考えにしたがえば、アウグスティヌスがこのような区別をせずに〈知解〉の恒常性を語っているのは、あくまでわかりやすさを優先しているためであつて、読者を〈内的な知解〉に接近しやすくさせるための準備である。Brachtendorfはこれを「教育的な配慮」と呼んでいる。

しかしながら、このような Brachtendorf の解釈には二つの問題点がある。1) アウグスティヌスがそのような「教育的な配慮」をしていることの意味、そしてその効果がいかなるものであるのかが不明瞭である

という問題点、2) 15 巻において、神の三一性と人間精神の三一性が比較されるにあたって、思考には肯定的な評価が与えられており、また〈内的な理解〉に思考という要素が含まれることが明言されており、このことが Brachtendorf の説とどのように調和するのか、という問題がある。

したがって 14 巻だけでなく、15 巻の内容にも整合的な解釈になるように、Brachtendorf 説の問題点を回避しつつ、代案を提示する。15 巻の議論を分析することによって、二つのことが明らかになる。まず言葉の三種類の区別である。すなわち、音声として発せられている言葉、音声で表されていないが、いわゆる内言として存在する言葉、そしてそのような内言によっても表現されていない言葉である。この最後の言葉を、アウグスティヌスは〈いかなる国の言語にも属していない言葉〉あるいは〈最奥の言葉〉と呼んでいる。15 巻の議論を分析することによって明らかになるもう一つの論点が、本研究の議論にとってより重要である。アウグスティヌスはこの〈いかなる国の言語にも属していない言葉〉と思考を結びつけるにあたって、思考という概念を新たに鋳直しているからだ。本論の III 章で明らかになったように、『三位一体論』の他の箇所の議論において、思考とは、記憶に含まれている対象に注意を向けることである、と規定され、恒常的に同じ対象には留まることのできないような働きであると考えられている。それに対して、15 巻においては、或る対象を思考する可能性それ自体が思考と看做されるようになる。いいかえれば、現に何かを思考することだけが思考ではなく、何かを思考しようということも思考であると、アウグスティヌスは考えていることになる。これをアウグスティヌスは「思考の可能性 (possibilitas cogitationis)」と呼び、〈いかなる国の言語にも属していない言葉〉と同一視している。そして、このような思考あるいは言葉は可能性として恒常的に存在している。そのような言葉ないし思考が関わる〈理解〉の場合には、先の解釈上の困難は生じないことになる。理由は以下の通りである。恒常的に存在している〈精神の自己理解〉が必要としていたのは、通常の意味での思考ではなく、「思考の可能性」であった。この「思考の可能性」が恒常的であるなら、〈精神の自己理解〉が恒常的であることと両立する(むしろ、〈精神の自己理解〉の恒常性の成立を支えている根拠が「思考の可能性」である)。したがって、解釈上の困難は解消される。また Brachtendorf のような解釈をとる必要がないことも明らかである。彼のいう〈内的な理解〉(つまり、〈精神の自己理解〉)は思考と両立しないものであったが、15 巻の議論によれば、内実は異なるけれども、そのような〈理解〉においても思考は必要とされる。そのため、14 巻の議論を教育的な配慮のためになされていると解釈する必要もなくなる。

本博士論文の結論部では、精神の自己意志(愛)について解説がなされたあと、「精神が自らを常に記憶し、知解し、意志(愛)する」というテーゼの内実が明らかになる。I 章の議論から明らかになったように、愛・意志には二つのタイプがあり、一方は何か二つのものを結びつけようとする愛・意志であり、他方は二つのものを実際に結びつけている愛である。自己記憶と自己知解の場合も同様に、この両者を結びつけている愛があることになり、これが自己意志・自己愛である。

さきのテーゼに対して本論文が提示する解釈は否定的なものである。まず「精神は自らを常に知解する」という要素は私たちの経験に即しているわけではない。V 章で示したように、この恒常的な自己知解を成立させているのは、〈思考の可能性〉であり、この概念によってアウグスティヌスは理解と思考にまつわる困難を回避することに成功した。ところで、〈思考の可能性〉は〈いかなる国の言語にも属していない言葉〉と同一視されていた。ここで新しい問題が生じることになる。定義上、われわれは〈いかなる国の言語にも属していない言葉〉を思考することはできないからである。したがって、恒常的に存在する自己知解が人間の経験を超え出るものである限りで、「精神は常に自らを記憶し、知解し、意志(愛)する」というテーゼは人間の経験において実質的な役割を果たしているわけではない。

とはいえ、これまで本論で扱ってきたアウグスティヌスの議論すべてにこのような欠陥——経験に即していないという欠陥——が生じるわけではない。不知から知への移行を運動的なモデルで記述しようとす

ていた議論 (I 章)、自己知の論証 (II 章)、思考そのものの内実に迫ろうとした議論 (III 章)、自己記憶の特殊性に関わる議論 (IV 章) は経験的な事実を基盤にしていたからである。消極的な言い方をすれば、人間精神のメカニズムの解明に寄与するような議論を自己記憶・自己知解・自己意志という三一性から期待することはできない。しかし、自己記憶・自己知解・自己意志という三一性のありかたを解明するために、アウグスティヌスが念入りに用意してきた概念的な道具立て (知・認識・愛・意志・思考・記憶・知解) は、経験的事実にもとづいて精神のありかたに迫るものであるのは確かである。

